

東京における1962年1.2月の異常乾燥*

藤井幸雄**

昭和35年の元旦は本邦南岸沿いに進む低気圧のため、東京では31日夕刻より1日の昼頃まで31.4mmの雨が降った。2日から晴天がつづき途中極く微量の雨はあったが、1.0mm以上の降雨がなかった日は2月10日までつづき40日間継続した。これは昭和18年の日数と同じであるが、観測が始まって(1876年)以来の記録である。

本年も35年と同じような傾向の天気で元旦に本邦南岸を進んだ低気圧のため23.3mmの雨が降り、あと晴天がつづいたが1月10日に5.7mm、18日に9.9mmの雨が降り、19日より2月24日まで1.0mm以上の雨は降らなかった。35年の時より20日程づれたが、36日間の継続日数であった。

明治9年から本年までの1.2月を中心とした1.0mm以上の雨が降らなかった継続日数30日以上を調査すると、

順位	期 間	継続日数
1	昭和35年1月2日～2月10日	40日
	昭和31年12月10日～32年1月18日	40日
	昭和18年2月8日～3月19日	40日
2	大正6年1月19日～2月26日	38日
3	昭和14年12月27日～15年2月1日	37日
	昭和37年1月19日～2月24日	37日
4	昭和3年12月26日～4年1月27日	32日
	明治42年11月30日～12月31日	32日

87年間に8回(約1割)もあり、晴天が続いたからとて特記することの程でもない。観測開始以来の無降水(0.0mmを含む)継続日数30日以上は3回にすぎない。

順位	期 間	日数
1	昭和31年12月10日～32年1月18日	40日
2	昭和14年12月27日～15年2月1日	37日
3	明治42年12月1日～12月30日	30日

本年の場合は2月11日に0.1mmの降雨があったので、無降水期間は23日間で上記の記録には遠く及ばない。

1月18日に日本海を東進した低気圧は、19日三陸沖に抜け980mb以下に発達し、2月2日までは西高東低型の気圧配置がつづき、大陸の高気圧は1月24日頃1056mbに達した。

2月3日より大陸の高気圧も1045mb以下となり、気圧傾度がゆるみ、8日頃本邦は移動性高気圧に覆われた。11日に日本海を東進した低気圧は、12日に北海道東方で急に発達し、本邦は再び冬型の気圧配置となって17

日までつづいた。これ以後は低気圧や高気圧が本邦付近を通過し、雲の出やすい天気となった。この期間の天気を3つに分けてみると、晴29日、晴たり曇り5日、曇り3日で晴天が圧倒的に多かった。1月19、29、2月9、11、12、23日に0.0～0.1mmの雨が降っているが、かなりの雨量が期待された機会が4度あった。それは

- 1月26、27日に日本海～北日本で気圧傾度がゆるみ、東海、関東地方付近に1002mbの低気圧が発生したが快晴のまま経過してしまった。
- 2月8日9時に上海付近に1017mbの低気圧があった。21時には九州西方に達し、九州から四国、中国地方では雨となり、関東地方もかなりの雨量が期待された。しかし、低気圧は本邦南岸を1020mbで東進したが9日に新島、八丈島の間を通り東京は晴一時曇りで雨量は0.0mmに過ぎなかった。
- 2月17日に満州より南東進した低気圧は18日夕刻能登半島付近(1006mb)より鹿島灘に抜けた。北陸地方には雪が降ったが太平洋側は快晴であった。
- 2月22日03時に上海付近に1010mbの低気圧があった。(2)の場合と同じ経路で23日夕刻、新島、八丈島の間を通り東京では0.1mmの雨で期待外れであった。

75年間の月平均降水量は1月50.4mm、2月74.9mmである。本年は1月40.5mm、2月13.5mmで1月はあまり開きはないが、2月は0.2%に満たない。しかし、1月1日に22.8mm、2月25、26、日に13.3mmと殆んど一度に降ってしまい、1月10日と18日を除けば無降水と云ってもよい状態であった。

75年間の月平均湿度は、1月63.6%、2月62.7%である。本年は1月52.2%、2月48.9%で1月は昭和15年と同じであったが、2月は観測開始以来の記録となった。また、最少湿度では1月は14%で11番目(他に同値が4)、2月は13%で4番目(他に同値が3)にランクされている。本年は雨の降らなかった継続日数と湿度の状況から考えると記録に残してもよい乾燥状態だった。

この異常乾燥により流感、火災、洪水、電力不足、野菜の値上り、空気汚染等都民の生活に直接、また間接的な被害は大変なものである。

1. 流感～1月なかばよりA2型インフルエンザが都内に蔓延し、都インフルエンザ対策本部の3月14日発表によると、都内、公、私立の幼稚園から高校までの38.5%にあたる1238校が、全校休校や学級閉鎖など

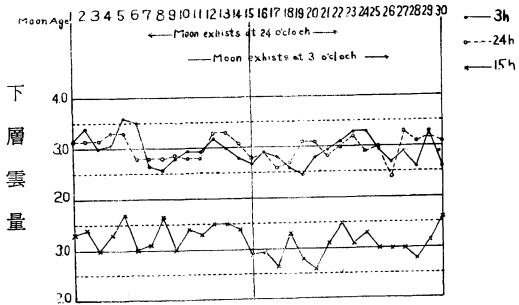
(71頁へ続く)

* A Long Spell of Fine Weather at Tokyo in Jan. and Feb. 1962.

** Yukio Fujii: 気象庁予報課

どれをみても夜間は雲量がすくない。前の全雲量についての調査の経験からみて、この夜間下層雲量の少ないことは観測値をそのまま信用してよいであろうか？

それを解明するために15時、24時、3時をえらんで日令別に統計した結果が第4図である。



第4図

各曲線とも同じような傾向を示しており、さらにいずれも日令による差が少ない。

気象の英語(45)

48. Possible, feasible および practicable

『可能な』という英語には上の3語が普通使われる。何でも構わず『可能な』といえば possible を使うというのは正確でない。3語は次のようにはっきり使い分けられているからである。

実際には大変むづかしいかも知れないし、また事情によっては実施不可能かも知れない場合でも、可能性があるなら possible といえるが、他の2語は使えない。しかし、そんなにむづかしくなく行なえ、またそうすることが望ましい時には、feasible を使う。また現在のままで、特別なことをしなくとも可能な場合には、practicable を使う。

(86頁より続く)

を行い、このうち小学校は60.1%の高い被患者を出した。一方都民の被患者は未だ発表されていないが、これまでの所65%にあたる650万人前後が流感に苦しめられたと推定される。また、死者は305人にのぼり、36年のB型インフルエンザによる死者123人を大巾に上廻った。

2. 火災～都(23区)の火災発生件数は毎年急速に増加している。本年の1、2月の発生件数は1917件

これを見れば日の明るい頃は概して下層雲量が少なく、月の暗い頃は概して下層雲量が多く、これは全雲量の場合と全く反対である。月の暗い頃に下層雲量が多いのは月の暗い頃には上・中層雲があってもこれを下層雲と誤認し易いためではあるまいかと思う。

総括して言えば全雲量と異なり下層雲量はたしかに夜間はすくなく、かつ観測された下層雲量は闇夜でもほぼ正確であるといえよう。

なお従前より月令による気圧配置変化の研究の一部として月令による雲量変化の調査が若干なされているが、筆者の前回の全雲量に関する調査と今回の下層雲量に関する調査の結果により、かかる調査には昼間雲量のみについて統計するべきであろうと思える。冬期は6時、18時の観測も不正確であろう。

付言

本調査に要した費用の一部は西部気象協会の研究補助費によった。一言付として同協会に謝意を表する。

抽象的な可能性は possibility で、feasibility ではない。計画等の可能性は、feasibility である。つまり執行委員会で論ずる計画は、possible plans ではなく feasible plans、または practicable plans でなければならぬし、学会で論ずるものは、feasible または possible な事柄が多い。feasibility を使った文例をつぎにあげる。“feasibility” でなければいけないことを味わって下さい。

The stratospheric analysis project of McGill University, through its daily cross sections and synoptic charts (up to the 25—mb level) has shown the feasibility of an intensive dynamic study of the middle stratosphere. (B.W. Boville)
(有住直介)

で、36年に比べると812件も上廻っている。日平均では33件になるが、毎日の件数を累算すると、1月1日～26日は緩慢な上昇(1日24件)、27日～2月22日は急上昇(1日42件)、23～28日は緩慢上昇(1日28件)のカーブをしており、雨量0.9mm以下の継続日数の日付とよく一致している。日平均(33件)と1日の発生数との差を取る取ると、1月23日より2月22日まで全部平均より多く発生し乾燥状態が火災の発生に如何に大きな要因となっているかがわかる。